8月3日（月曜日）「マリヤへの御告げ」

【新改訳 2017】

ルカ　　1•26－38

「すると御使いが言った。『こわがることはない。マリヤ。あなたは神から恵を受けたのです。ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。その子は‥‥いと高き方の子と呼ばわれます‥‥』」（30－32節）

　クリスマス物語でよく知られているこの御告げにも、実に多くの内容と意義があります。今回は、特にマリヤの選びに焦点を合わせます。

　田舎町ナザレの一処女にすぎないマリヤが、神の御子が人の子イエスとして世に来られるにあたり、その母となるべく選ばれたのです。思い当たる理由は、彼女がダビデの子孫の一人であることと、神の恵みによるということだけです。「恵まれる」とはなんということでしょう。それはしばしば個人的満足以上のことであり、時には歴史的意味をもち、責任を伴うこともあります。

　マリヤは、とまどいながらも御使いのことばを信じて恵みの

大任を受け止めました。私たちは恵みをどう考えているでしょうか。

～祈り～

主よ。あなたの恵みにあずかることがどんなことかをよくわかる者にしてください。また、その選びにふさわしく生きることができるように助けてください。

【学びのために】

選ばれることは、名誉もさることながら、大きな責任の伴っていることが多いことを忘れてはなりません。